小林章夫著,『エロティックな大英帝国 —紳士アシュビーの秘密の生涯』

Akio KOBAYASHI, *The Erotic Empire of Great Britain: The Secret Life of Ashbee, Gentleman*

（平凡社新書，209 頁，平凡社，2010 年 6 月）

ISBN: 9784582855296

（評）植木研介
Kensuke UEKI

1997 年に度会好一氏の著された『ヴィクトリア朝の性と結婚 — 性をめぐる 26 の神話』(中公新書) の書評を,『英語青年』の誌上を借りて，したゆえであろう,『エロティクな大英帝国』という，販売目的であろうが，いささか耳目を引きつけ易くした題目の新書版の書評をすることになった．この本のタイトルは副題と比べて一段と大きな活字が用いられており，本の帯にはさらに大きく「『お堅い』イギリス，その隠微な欲望」の文字が躍る．しかしこの書の内容は副題にある「紳士アシュビーの秘密の生涯」に焦点をしぼった，堅い学術書ではないけれど，一般読者向けとしては味わい深く丁寧な好著である．その論考は筋が通っている．キャッチコピーであるタイトルで少しばかり内容が被害を被っているといってよいかもしれない．

書評を引き受けたのは,『コーヒー・ハウス　都市の生活史 —18 世紀ロンドン』(駸々堂出版, 1984）や『クラブ —18 世紀イギリス政治の裏面史』(駸々堂出版, 1985）といった，18 世紀のロンドンを生き生きと描いた小林氏の本を読み，内容の面白さと共に著者はどのような人なのか興味を抱いていたことが第一の理由だ．イギリスの 18 世紀と言えば,『クラリサ・ハーロウ』とほぼ同じこの世紀の中葉に重なるように『ファニー・ヒル』が出版された時期にあたる．ヴィクトリア朝の小説を，それもディケンズを中心にしてのみ，論文を書いてきた私としては，関心がありながら，同時に，すでに読んでいながらそれについて書けなかった世紀なのだ．

去年の小さな英文学の集まりの懇親会で，ジョイスの文学を中心にして生活の糧としている研究者と『ファニー・ヒル』を原文で読んだ時期を話題にしていたら，彼は高等学校時代に，同級生の中で互いに先を争って回し読みしたことを語ってくれた．私は父の蔵書のなかから 1888 年にパリで印刷されたものを見つけて，辞書も引かずに，というか辞書に未だフォレター・ワ — ズの多くが載せてなかった頃に，英語で読んだことを説明していたら，私が以前，修士論文の指導をした若い女性が，現在はシェイクスピアで博士論文を書こうと

しているのだが,「何の話ですか？『ファニー・ヒル』って？」と割り込んできた．かつての指導教官としては，英文学教育の中に大きな空白状態のあることを思い知らされた．それとともにやはり女性の関心と男性の興味の差を認識したのである．現在では差が無くなっているとばかり思っていたが，キンゼイが性に関する報告をまとめ上げた 20 世紀中頃の時代にアメリカで見られたマスタベーションに対する性差がいまだに日本では残っていたのだ．辞書を参照せずに読める，すなわち内容理解が可能なのは，興味を持って読んでいけばおのずと意味が分ってくるのである．読書百遍，意おのずから通ず，なのだ．『クラリサ・ハーロウ』は確かに私も大学の演習の時間にテクストとして何年にもわたって使用してきた．だが,『ファニー・ヒル』は，講義で言及はしても，テクストとして取り上げたことはない．私の中のピュ — リタニズムの残滓が問題なのかもしれない．それにしても 1985 年には『ファニー・ヒル』は背表紙が黒いペイパーバックであるペンギン・クラシックスの中に収められ発行されている．こうした状況であれば演習の中でも取り上げやすいのではないか，なにか方策があるはずと，思案するがいかがであろうか.『ファニー・ヒル』は英語文章のレヴェルからいっても，難解な文章構造をもつ『クラリサ・ハーロウ』と比べて文学的に劣るとしても，比喩を使わぬ『わが秘密の生涯』よりは間違いなく深みがあり文学的であるのだから．この 3 つの作品は 2 つが書翰体の物語であり，1 つは自伝の形式を採っており一人称の語りになっているのは面白い．ここに述べたような読書体験から，この本を書評する土台となる文献は手許に揃っていると判断したのも，書評を引き受けた理由でもある．

この著書の副題の中にある「紳士アシュビーの秘密の生涯」はもちろん正確には 1888 年から 1894 年にかけてアムステルダムで 11 巻本として版行された,『わが秘密の生涯』(*My Secret Life*) のことである．この 11 巻本はこの小林氏の参考文献で紹介してあるネット上で公開されているフルテクストで読むことができる．ただし私の所有しているのは，完全無削除版でなく，無削除ではあるが縮約された，G. レグマンの序文のついたグロウブ・プレス社の 1966 年版の第 19 刷と, ジェイムズ･キンケイドが縮約し序章をつけた 1966 年のシグネット･クラシックス版である．縮約版でもペイパーバックでそれぞれ 600 頁から 700 頁になろうというものを，小林氏は 4200 頁もある完全版を,「基礎作業」として全 184 章を半年かけて読まれたという.「まずその感想をのべよう.『疲れた』の一言である」と書いておられる．縮約版でも途中から放り出したくなるほどの，執拗だが情感のこもらぬ性行為の繰り返しで，小林氏の苦行に頭を下げるだけである．その難行の末こうも言われている.「その結果,『ファニー･ヒル』と『わが秘密の生涯』では, 全く違う世界であることがよくわかった.」イーアン･

ギブソン氏や小池滋氏の，執筆者ウォルターはヘンリィ・スペンサー・アシュビーだとの判断に賛成して，小林氏はその作品をアシュビーの世界の探査に乗りだされている．そうして，この本の結論として，アシュビー本人が「実体験をそのまま記録したものだというわけでなく，むしろ実体験をもとにそれを膨らませて書いたと考えるべきなのではないか」との意見に到達されている．アシュビーの執筆説についても，次のように結論付けられている．「すでに本書で紹介してきた状況証拠を重ね合わせてみると，あの時代にこれだけのものを書けた人物はほかに思い浮かばない．」

ヴィクトリア朝を研究のしている人は，すぐにスティーヴン・マーカス（Steven Marcus）の *The Other Victorians. A Study of Sexuality and Pornography in Mid-Nineteenth-Century England* (1964) を思い浮かべられ，イギリスの工業化が貧富の差の拡大につながる影の部分をもたらし，それをディケンズが作品の中に，娼婦の姿として描いていることは百も承知のことと思う．ヘンリー・アシュビーは1834年4月21日にロンドンに生れ1900年7月29日に亡くなっており，彼の生涯を追跡することはヴィクトリア朝そのものを，ある視点から見直すことにつながるのだ．この本の中で小林章夫氏は見事に成功しておられる．特別にこだわった価値観に縛られることなく書かれており，これまでポルノグラフィーを読んだことのない，見たことのない方がおられれば，強くお薦めしたい本である．

さいごに，スティーヴン・マーカスは巧妙で説得力のある *Dickens: From Pickwick to Dombey* (London: Chatto and Windus, 1965) を出版しており，ジェイムズ・キンケイド（James Kincaid）は *Dickens and the Rhetoric of Laughter* (Oxford: Clarendon Press, 1971) を著している．前者には私が修士論文を書いたときにかなりの影響を受けたし，後者は，あるところで書評したが，笑いはなにか表現されている価値観に同意をした感情の表出である，との観点から書かれた批評書となっている．これら二人のディケンジアンが一人は *The Other Victorians* (1964) という見事な研究書をものし，もう一人は，1999年に *My Secret Life* を縮約し編集している．『ファニー・ヒル』の新訳は，この本の記述から推測して，ほぼ整っているようなので，ここらで一つ該博な小林章夫氏のディケンズ論も期待したい．